

cido. Pensei, no meu íntimo, que Andrea del Sarto era impossível nesse caso. Entretanto, tinha que admirar o seu fervor. Eu queria permanecer imóvel na medida do possível, mas sentia vontade de urinar. Os músculos do meu corpo se remexiam. Não podia prorrogar nem mais um minuto, e, inevitavelmente, cometi a descortesia de estender minhas patas dianteiras, abaixar a cabeça e dar um enorme bocejo. Nessas condições, não adiantava mais continuar quieto. Como o plano do meu dono havia sido frustrado, aproveitei a ocasião e fui andando em direção aos fundos para urinar. De dentro da sala, ele gritou: "Seu idiota!", numa voz que misturava decepção e ira. Costuma xingar os outros chamando de idiota. Compreendo que não conhece outra maneira de maldizer, mas acho falta de educação chamar outros de idiota, desconsiderando que eu tinha suportado até aquele momento. Mesmo assim, eu poderia tolerar alguns insultos caso ele fizesse uma cara simpática quando eu ficava sobre as suas costas; mas ele não fazia nada de especialmente bom para mim, e só porque me levantei para urinar, me chamou de idiota; era demais. Os seres humanos tendem a ser prepotentes, sobre-valorizando suas capacidades. Enquanto não aparecer alguém um pouco mais forte que os seres humanos para maltratá-los, essa prepotência não há de se acabar.

(Título original: Wagahai wa neko de aru; 1905)

どんぐりと山猫

作 宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそっと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床にもぐってからも、山猫のにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあっと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。栗の木はちょっとしずかになって、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもっといってみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまってまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝という

のは、まっ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷におちているのをいうのでした。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかったかい。」滝がびーびー答えました。

「やまねこは、さっき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあもう少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」

滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どってこどってこどってこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかったかい。」

とききました。するときのこは、

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。一郎は首をひねりました。

「みなみならあっちの山のなかだ。おかしいな。まあすこし行ってみよう。

きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どってこどってこと、あのへんな楽隊をつづけました。

一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠がぴよんととんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかったかい。」とたずねました。するとりすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行ったなんて、二とこでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれどもまあすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすはもう居ませんでした。ただくるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらっとひかっただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそったみちは、もう細くなって消えてし

まいました。そして谷川の南の、まっ黒な樅の木の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。樅の枝はまっくろに重なりあって、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をばとばとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはっきりと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもって、だまってこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行って、びっくりして立ちどまってしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半天のようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがって山羊のよう、ことにそのあしさときたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かったのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやっとならって言いました。

「山ねこさまはいますぐに、ここに戻ってお出やるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎょっとして、一あしうしろにさがって、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。するとその奇体な男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎はきのどくになって、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、きものえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生っていうのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあわれに聞こえたので、一郎はあわてて言いました。

「いいえ、大学校の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔じゅう口のようにして、にたにたにたにた笑って叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになって、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっぱ山猫の耳は、立って尖っているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはぴよこっとおじぎをしました。一郎もていねいに挨拶しました。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」

山猫はひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらっしやいました。じつはおとといから、めんどろなあらそいがおこって、ちょっと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆっくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうもまい年、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、巻煙草の箱を出して、じぶんが一本くわい、

「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびっくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山猫はおうようにわらって、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅつと擦って、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていましたが、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようで

した。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当たりがいいから、そここの草を刈れ。」やまねこは巻きたばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ざっくざっくと、やまねこの前とこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかって、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんがらんと振りました。音はかやの森に、がらんがらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこししずかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い縞子の服を着て、勿体らしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうばちつ、ひゅう、ばちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなかおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張って言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いいえ、だめです、なんといったって頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがっています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつつついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんともころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゅうばちつとならしましたのでどんぐりどもは、やっとしずまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判もうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ。」別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判もうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」がやがやがやがや。

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんところえる。しずまれ、しずまれ。」別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそっと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」一郎はわらってこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できたんです。」山猫はなるほどというふうにならずいて、それからいかにも気取って、繻子のきものの胸を開いて、黄いろの陣羽織をちょっと出して、どんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しんとしてしまいました。それはそれはしんとして、堅まってしまうました。

そこで山猫は、黒い繻子の服をぬいで、額の汗をぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六ぺん、鞭をひゅうぱちつ、ひゅうぱちつ、ひゅうひゅうぱちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたずけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからは、葉書が行ったら、どうか来てくださいませんか。」

そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかわりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、山猫はまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらって言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめたほうがいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまづかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。

「それでは、文句はいままでのおりにしましょう。そこで今日のお礼ですがあなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかつたら、めっきのどんぐりもまげてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかって叫びました。

「ちょうど一升あります。」山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めをつぶって、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのこでこしらえた馬車がひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゅう、ぱちつ。

馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くを見ていました。

馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えばよかったと、一郎はときどき思うのです。

1921年9月

O gato montês e as castanhas

Kenji Miyazawa

Tradução: Ferdinando Woicickoski**

No entardecer de um sábado chegou na casa de Ichiro um estranho cartão postal:

“Senhor Ichiro Kaneta, dia 19 do mês nove. Espero que esteja tudo bem com você. Amanhã, como vai ser realizado um julgamento trabalhoso, venha por favor. Por favor não traga armas de fogo.

Atenciosamente,

Gato Montês”

Era tal o conteúdo desta carta. As letras estavam todas mal escritas, tortas, e a tinta estava seca como se tivesse estado grudada nos dedos. Mesmo assim, Ichiro ficou contentíssimo. Com cuidado, guardou o cartão postal na pasta da escola e ficou pulando na frente de casa de tão contente.

Até depois de se deitar na cama ficou pensando sobre o tal julgamento trabalhoso, imaginando o rosto do gato montês miando. Ficou acordado até tarde. Quando Ichiro despertou, já estava tudo claro. Ao sair da casa, viu as montanhas erguidas soberbamente à sua frente como se tivesse surgido agora mesmo, se enfileirando embaixo do céu anil.

Ichiro fez a refeição apressadamente e foi andando pela estrada que margeava o rio em direção à nascente. Quando o vento cristalino soprou, uma castanheira derrubou suas castanhas ruidosamente.

Ichiro olhou para a árvore e perguntou:

- Castanheira, castanheira, o gato montês não passou por aqui?

A castanheira ficou um pouco mais silenciosa e respondeu:

- Ah, o gato montês? Ele passou hoje cedo numa carroça, voando em direção à leste.

- Se foi para o leste, é para lá que eu vou. Estranho... Então, vou

Segui-lo andando. Obrigado castanheira.

A castanheira, sem responder, voltou a derrubar as castanhas. Ichiro andou mais um pouco e chegou até a Cascata do Flautista. Ela é chamada por esse nome porque mais ou menos no meio do penhasco de uma rocha alva existe um pequeno buraco do qual sai água que faz um som parecido com o de uma flauta. A água forma uma cascata e cai no vale.

Ichiro ficou de frente para a cascata e gritou:

- Ei, ei, Flautista, o gato montês não passou por aqui?

* Bacharelado em Letras - UFRGS / Habilitação Tradutor - Português e Japonês

A cascata respondeu num assobio.

- O gato montês passou agora há pouco voando numa carroça em direção ao oeste.

- Estranho. Oeste é a direção da minha casa. Mesmo assim, eu vou andar um pouco mais. Obrigado flautista.

A cascata continuou tocando flauta como antes.

Ichiro andou mais um pouco. Abaixo de uma faia havia vários cogumelos brancos, formando uma estranha banda de música. Ichiro se agachou e perguntou:

- Ei, cogumelos, o gato montês não passou por aqui?

Então os cogumelos responderam:

- O gato montês, hoje de manhã cedo, passou voando numa carroça em direção ao sul.

Ichiro ficou perplexo.

- Se for para o sul é o meio daquela montanha. Estranho. Bem, vou andar mais um pouco. Obrigado cogumelos.

Todos os cogumelos pareciam ocupados, tamborilando, e continuaram tocando aquela estranha banda de música. Ichiro andou mais um pouco. Então encontrou um esquilo saltando de galho em galho em uma nogueira. Ichiro em seguida fez um sinal com a mão, parou e perguntou:

- Ei, esquilo, o gato montês passou por aqui?

Então o esquilo, do alto da árvore, levando a mão acima dos olhos e olhando Ichiro, respondeu:

- Se é o gato montês, essa manhã, quando ainda estava escuro, ele passou em direção ao sul voando numa carroça.

- Estranho, já estou indo em direção ao sul há tempo e essa é a segunda vez que me dizem isso. Mesmo assim vou andar mais um pouco para ver o que acontece. Obrigado esquilo.

O esquilo já tinha ido embora. O galho mais alto da nogueira tremeu, e por alguns instantes o galho da faia ao lado reluziu.

Depois de Ichiro andar mais um pouco, a estrada que acompanhava o rio se estreitou e sumiu. Então, a leste do rio, na direção de um bosque de teixos negros, havia uma outra estrada estreita. Ichiro subiu por esta estrada.

Os galhos de teixo sobrepostos fechavam o céu escurecendo tudo e a estrada tornou-se uma lombaa muito íngreme. Ichiro ficou com o rosto vermelho, pingando suor, enquanto subia a lombaa. De repente tudo ficou claro e Ichiro sentiu uma agulhada nos olhos. Ali, havia uma clareira cercada por um imponente bosque de teixos cor de oliva formando um belo campo dourado onde a grama tremulava com o vento.

Bem no meio desse campo, um homem baixo e de forma estranha, calado e com os joelhos dobrados, segurando um chicote de couro, o olhava. Ichiro foi se aproximando aos poucos, e se estancou, espantado. Esse homem era caolho. O olho que não enxergava era branco e se contraía. Ele vestia algo estranho, pareci-

do com um paletó ou *hanten*¹. Além de tudo, os pés eram curvados como os de um cabrito. Ainda, esses pés tinham a forma de espátulas de servir arroz.

Apesar de Ichiro ter uma sensação ruim, se acalmou na medida do possível e perguntou:

- Você não viu o gato montês?

Então o homem, olhando de soslaio para o rosto de Ichiro, abriu a boca e rindo maliciosamente disse:

- O senhor Gato Montês logo vai regressar para cá. Você deve ser o senhor Ichiro.

Ichiro se assustou, recuou um passo e disse:

- É, eu sou Ichiro. Mas por que você sabe isso?

Então aquele homem estranho acabou rindo ainda mais.

- Então você leu o cartão postal, não?

- Eu vi, por isso eu vim.

- Aquele texto estava muito ruim. - Disse o homem olhando triste para baixo.

Ichiro ficou com pena:

- Aquele texto estava muito bom.

O homem ficou contente, com a respiração ofegante, ficou vermelho até o entorno da orelha, abriu a gola da roupa e abanando o corpo perguntou:

- Aquela caligrafia também estava bem boa?

Ichiro, sem pensar, começou a rir e respondeu.

- Bem boa. Nem alguém da 5ª série escreveria algo daquele jeito.

Então o homem, de repente, fez novamente uma cara feia.

- Essa tal quinta série é a quinta série do ensino fundamental?

Era uma voz tão sem força e melancólica. Por isso Ichiro se apressou em dizer.

- Não, quinto ano universitário.

Então o homem se alegrou novamente, e como se todo o rosto fosse uma boca, gritou sorrindo.

- Fui eu que escrevi aquele cartão postal.

Ichiro resistiu à vontade de rir e perguntou:

- Mas quem é você?

O homem ficou sério subitamente e disse:

- Eu sou o cocheiro do senhor Gato Montês.

Naquele momento o vento soprou forte, o gramado ondulou e o cocheiro imediatamente fez uma cerimoniosa reverência. Ichiro achou estranho, se virou e viu logo ali o gato montês, vestindo algo parecido com um *jinbaori*² amarelo, com os olhos verdes bem arregalados.

¹ Hanten – espécie de guarda-pó de estilo antigo usado no trabalho ou nas lojas.

² Jinbaori - traje usado pelos generais japoneses por cima das outras roupas.

Ichiro achou que as orelha do gato montês eram pontudas. De súbito o gato fez uma reverência. Ichiro também fez uma respeitosa saudação.

- Olá, bom dia, obrigado pelo cartão postal de ontem.

O gato montês puxou os bigodes, estufou a barriga e disse.

- bom dia, seja bem vindo. Na verdade eu tive problemas com o julgamento e pensei em ouvir a sua opinião. Bem, fique a vontade e descanse. Logo virão as castanhas. Se bem que todos os anos eu sofro com esse julgamento.

O gato montês tirou do bolso uma caixa de charutos, pegou um para si e ofereceu outro a Ichiro:

- Aceita?

Ichiro ficou surpreso e disse que não.

O gato montês sorriu magnanimamente e observou:

- Você ainda é muito jovem.

Riscou o fósforo, intencionalmente torceu a cara e soltou uma fumaça azul. O cocheiro do gato selvagem estava parado em pé, em posição de sentido mas lágrimas rolavam de seus olhos e parecia que estava tentando resistir à vontade de fumar.

Naquele momento Ichiro ouviu um som parecido com o de sal estalando vindo de perto dos seus pés. Se assustou, se agachou e olhou. No meio da grama, aqui e ali, havia coisas redondas e douradas brilhando intensamente. Ele olhou bem e viu castanhas que usavam calças vermelhas que se somava o número que vinha a ser mais de 300. Todas diziam alguma coisa, formando um zumbido.

O gato montês atirou o charuto longe e ordenou ao cocheiro:

- Ah, vieram. Eles vêm como formigas. Ei, toque logo o sino. Como hoje está batendo bastante sol neste local, corte a grama dali.

O cocheiro, também muito apressado, tirou uma grande foice da cintura e ceifou a grama em frente ao gato montês. Ali, dos quatro cantos da grama, surgiram as castanhas falando e fazendo zunido. O cocheiro, então, badalou o sino. O barulho ecoou pelo bosque de teixos e as castanhas douradas ficaram um pouco mais quietas. Quando viu isso, o gato montês já vestia uma *jinbaori* comprida e preta de linho e estava suntuosamente sentado em frente às castanhas. Ichiro achou que era como uma caricatura de pessoas peregrinando ao grande Buda de Nara.

O cocheiro estalou o chicote umas duas ou três vezes. O céu estava anil transparente e as castanhas brilhando ficavam realmente bonitas. O gato montês demonstrou um pouco de preocupação, mas mesmo assim disse, impondo artificialmente sua autoridade:

- Hoje já é o terceiro dia do julgamento, que tal chegarmos a um acordo?

Todas as castanhas gritaram:

- Não, de jeito nenhum. Não importa o que digam, aquele que tem a cabeça pontuda é o mais proeminente. E eu sou o que tem a cabeça mais pontuda.

- Não, está errado. Proeminente é ser redondo. E o mais redondo sou eu.

- Ser grande. Ser grande é que é proeminente. E como eu sou o maior, eu é que sou proeminente.

- Não, não é. Eu sou muito maior. O juiz não disse isso ontem mesmo?

- Não é isso não. É a altura. É ser alto.

- Quem é bom no jogo de empurra-empurra. Vamos decidir no jogo de empurra-empurra.

Todos zumbiam como um ninho de marimbondos que foi cutucado, e não se podia entender nada.

Então o gato montês gritou:

- Façam silêncio! Onde pensam que estão? Ordem, ordem. O cocheiro estalou o chicote e as castanhas finalmente silenciaram. O gato montês esticou e torceu os bigodes e disse:

- Hoje já é o terceiro dia do julgamento, que tal chegarmos a um acordo?

Todas as castanhas gritaram:

- Não, de jeito nenhum. Não importa o que digam, aquele que tem a cabeça pontuda é o mais proeminente.

- Não, está errado. Proeminente é ser redondo.

- Não é não. É ser grande.

Elas zumbiam, e não se podia entender nada. Então o gato selvagem gritou:

- Fiquem quietos! Onde pensam que estão. Ordem, ordem.

O cocheiro estalou o chicote e as castanhas finalmente silenciaram. O gato montês esticou e torceu os bigodes e disse:

- Hoje já é o terceiro dia do julgamento, que tal chegarmos a um acordo?

Todas as castanhas gritaram:

- Não, de jeito nenhum. Não importa o que digam, aquele que tem a cabeça pontuda que é...

Zumbiam.

Então o gato montês gritou:

- Façam silêncio! Onde pensam que estão. Ordem, ordem.

O cocheiro estalou o chicote. E todas as castanhas finalmente silenciaram.

O gato cochichou para Ichiro:

- Esta é a situação. O que devo fazer?

Ichiro respondeu dando uma risada.

- Então que tal dar esta sentença: "Entre os que estão aqui, aquele que é mais burro, desorganizado e relapso é o mais proeminente". Eu ouvi esse texto num sermão.

O gato montês acenou a cabeça como que concordando e como se fosse alguém importante, abriu a gola da roupa de linho, mostrou um pouco o *jinbaori* dourado e declarou às castanhas:

- Tudo bem, tudo bem. Façam silêncio. Eu declaro que entre os que estão aqui o mais proeminente é aquele que é burro, desorganizado, relapso e que tem a cabeça achatada.

As castanhas se calaram. Ficaram completamente caladas e se paralisaram. Então o gato montês secou o suor da testa com o bordado da roupa preta e segurou a mão de Ichiro. O cocheiro também se alegrou muito e fez o chicote soar umas 5 ou 6 vezes.

O gato montês falou:

- Muito obrigado. Muito obrigado por resolver esse julgamento horrível em um minuto e meio. A partir de agora, no meu tribunal, seja juiz honorário. Por favor, no futuro também poderia vir quando receber um cartão postal? Vou lhe recompensar cada vez que vier.

- Eu aceito. Não preciso de recompensa.

- Não, por favor, aceite. Faz parte da minha personalidade. Então, a partir de agora, quando escrever um recado por cartão postal para senhor Ichiro Kaneta, vou determinar sempre este local como tribunal, certo?

Ichiro disse:

- Está bem, não se preocupe.

Mas o gato montês ainda parecia querer dizer alguma coisa, torceu os bigodes por um certo tempo, piscou os olhos e finalmente decidiu falar.

- Além disso, quanto ao texto do cartão postal. Que tal escrever assim: "deve comparecer amanhã por existir uma tarefa"?

Ichiro respondeu rindo.

- É estranho. É melhor não fazer isso.

O gato montês olhou para baixo, torceu os bigodes por um tempo como se tivesse arrependido de ter falado de um jeito ruim, mas finalmente desistiu e falou:

- Então vamos deixar o texto como estava. Quanto a recompensa de hoje: você prefere cabeça de salmão salgada ou um *sho*³ de castanha de ouro?

- Prefiro as castanhas de ouro.

O gato montês, como se achasse bom não ter sido o salmão, falou rapidamente ao cocheiro.

- Traga logo um *sho* de castanhas. Se não for suficiente para um *sho*, também traga as castanhas banhadas. Depressa.

O cocheiro colocou as castanhas de antes num *masu*⁴, mediu e gritou.

- tem exatamente um *sho*.

O *jinbaori* do gato da montanha soou com o vento. Então o gato montês se esticou, fechou os olhos, deu um meio bocejo e disse.

- Prepare logo a carroça.

E foi trazida a carroça feita de um grande cogumelo branco. À ela estava

atrelado um cavalo de forma estranha e cor de rato.

- Vamos te levar de volta para casa, disse o gato montês.

Os dois embarcaram na carroça e o cocheiro colocou dentro dela o *masu* com as castanhas.

O chicote estalou. A carroça se afastou do gramado. Os arbustos e as árvores se sacudiam como se fossem fumaça. Ichiro olhava as castanhas de ouro enquanto o gato montês, com uma cara fingida, olhava para longe.

Conforme o avanço da carroça, o brilho das castanhas foi enfraquecendo e logo depois transformaram-se em castanhas marrons comuns. Então, tanto o *jinbaori* dourado do gato montês, quanto o cocheiro e a carroça de cogumelo sumiram repentinamente e Ichiro encontrava-se em pé, segurando o *masu* com as castanhas, na frente de sua casa.

E depois disso não recebeu mais cartões postais do gato montês. Ichiro, de vez em quando, pensa que deveria ter dito que bastava conter no cartão as palavras: "deve comparecer".

Setembro de 1921.

³ Sho – volume equivalente a um 1,8 litros.

⁴ Masu - caixa de madeira usada para medição de volumes.